献　　辞

山中　宏先生は，2006年3月末日をもって定年を迎えられました。規程によるとはいえ，やはり寂寥の感を禁じ得ません。これまでのご指導とご功績に対し，心から感謝の意を表する次第であります。

先生は，1960年3月京都大学法学部を卒業され，民間企業をへて，1994年4月本学商経学部に迎えられました。商経学部・経済学部を通じて，12年間にわたり教育・研究にご尽力いただきました。温厚篤実なお人柄は多くの人に慕われ，山中ゼミは常に人気ゼミの一つでした。ゼミ生以外でも，「山中ファン」の学生は少なくありませんでした。

本学着任後は，金融論，オーストラリア経済論を担当されました。情熱をもって，教育にあたられたご功績は，誠に感慨深いものがあります。非常に教育熱心な姿勢は，まさに模範的存在の一人でありました。研究面では，メインバンク制の研究を中心に，単著3点，共著1点を刊行されたほか，コンスタントに論文を発表されています。民間企業時代の調査部門・国際部門のキャリアを活かして，学問を楽しみながら，本学での学究生活を全うされたように拝察いたします。

先生は，ご退職後，エッセイ集『深海』（武蔵野文學舎，2006年9月）を刊行されています。拝読させていただき，真摯な生き方に深い感銘を覚えました。学生時代のESSの活動をはじめ，旅，音楽をこよなく愛し，さらに絵画，俳句とその多才ぶりには驚かされます。エッセイ集の中には，「卒業式とゼミナール学生」（三，同窓・キャンパス）が5頁にわたって綴られています。山中ゼミ卒業生への慈愛溢れる一文が印象的であります。人生は「多くの人との出会い」と「思い出の積み重ね」であると回顧されておられます。巻末に俳句30句が収録されており，“卒業の子を見送りてわれも去る”の一句は胸にじいんときます。

行政面では，国際交流委員会の委員としてご活躍され，全学の会議の模様

などはきちんと文章で報告してくださるのが常でした。教授会や学部の各種委員会はほぼ皆出席であり，さすが企業出身の教授と敬服させられました。学問・研究のあり方が問われている現在，教育に全力投球された，先生の熱い思いを，今後の学部運営に活かして参りたいと存じます。

本号は，山中　宏教授退任記念号として企画編集されました。本学部専任教員のみならず，外部の高名な先生方からも多数の玉稿をいただきました。ここに感謝と敬意をこめて，本論文集を教授に捧げます。

末筆ながら，先生の一層のご健康とご活躍を祈念いたします。併せて，この記念号に玉稿をお寄せいただいた執筆者の各位ならびに編集委員会の労に厚くお礼申し上げます。

2006年11月

経済学部長　武　知　京　三